

4-3. 救援物資

1. 救援物資の受入・仕分け

01. 檜山管内では檜山支庁が受け入れの窓口となった。

檜山管内を中心とした未曾有の被害に対し、全国から衣料品や食料品など、救援物資を檜山支庁を窓口として寄せられました。北檜山町へも直接、北海道や北海道町村会をはじめ、企業や民間団体、個人、在札太櫓会などの本町出身者など、多くの方々から見舞金や電化製品などの救援物資が寄せられました。[『北海道南西沖地震北檜山町被災記録書』北檜山町(1995/3), p. 44]

02. 日赤はいち早く救援物資を調達し、奥尻町に届けた。

日赤の活動は迅速だった。医療・救護活動等の要員を急速派遣する一方、奥尻町赤十字災害対策本部からの要請により、日赤北海道支部を通じて(救援物資は)奥尻に届けられた。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p. 156]

03. 膨大な救援物資を整理・仕分け・配分する大変な作業を黙々とこなしたのは数多くのボランティアたちだった。

全国から奥尻に届けられた救援物資の数は、その全貌がつかめないほどの規模にのぼった。学校の体育館をはじめ、公共スペースを着々と埋めていく大小無数の救援物資。この膨大な救援物資を整理・仕分け・配分する大変な作業を黙々とこなしたのは、夏休み等を利用して全国から奥尻に駆けつけてくれた数多くのボランティアたちだった。奥尻住民の心を物心ともに支えてくれた善意の輪。奥尻町民は、この事実を永遠に記憶し続けるだろう。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p. 127]

2. 救援物資の裏に生じた問題

01. 救援物資の仕分けには相当の日数を要した。

問題点もありました。送られてきたものを整理し、中身を確認しなければならなかったこと。その中身を分類、仕分けしなければならなかったことなどありました。災害対策本部では救援物資班を組織し、これらの作業に当たりましたが、膨大な量の物資の整理に相当の日数を要しました。[『1993年北海道南西沖地震 瀬棚町災害記録書』瀬棚町(1995/3), p. 105]

02. 生ものの救援物資は腐敗してしまう。

「(前略)これはとくに郵送されてきた小包に目立った現象なのですが、なま物あるいは半なま状態の食糧を郵便で送ってくださった方がかなりおられたんですね。通常の状態ならともかく、なにしろいったん集荷される札幌郵便局、函館郵便局などが臨時態勢を

取っても整理・分類しきれないほどの数が送られてきたため、本来なら2日か3日で奥尻に届くものも、1週間あるいは10日間もかかることが少なくなかったわけです。そのため、もったいないことに、かなりの食糧が腐敗してしまいました。こういうケースでの被災地への救援食糧は、やはり缶詰(ビン詰めは壊れやすい)などがいちばん望ましいというのが実感ですね」[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.158]

03. 使いみちのなさそう衣類は救援物資として役にたたない。

救援物資としての衣類というのは、基本的に使い切れないほど集まる傾向がある。また、交通手段さえ確保されれば、衣類は比較的容易に集めることができる。そこに、現実には使いみちのなさそうなものばかりが集中して、かつバラバラに送られてくると、整理・分類だけでもまた膨大な時間と労力がかかる。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.158]

04. 分類整理された下着類やトレーナーなどは非常に役立つ。

衣料品メーカーが一括して送ってくれた下着類や、トレーナー、スウェットなどは非常に役立った。何よりも梱包の表に、サイズが明記されており、住民への配分の際の分類の手間が省けたのは大きかった。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.158]

05. 使い古しの衣類やくつ、手のついた食料品などは、受け手にとってはむしろ迷惑かもしれない。

僕が奥尻に行って考えるようになったのは、山のように送られてくる救援物資とたくさんいるボランティアを見てです。企業から送られてくる物資は僕の中から役に立っていたと思う。しかし、一般の人からのものの中には、使い古しの衣類やくつ、手のついた食料品など、その他いろいろでした。送った人にとっては善意なのかもしれないが、今まで何不自由なく生活していた人にとって、他の人が一度使用したものは、そんなにうれしくないものだと思う。むしろ迷惑に思うのかもしれない。[『それでも奥尻の海は青かった 北海道南西沖地震救援キャンプ報告書』北海道YMCA(1993/10),p.16]

06. 救援物資を送る側がもう少し考えて物資を送らなければ、物資がただのゴミになってしまうのではないかと思われた。

奥尻でのボランティア活動に参加してみて救援物資の量の多さに驚きました。食料は全島民が食べる2年分ぐらいの食料が送られてきているそうです。食糧については消化できるでしょうが私が注目したのは、使えないような衣服、古い下着などが送られてきているということです。奥尻に自分の家の物置の奥にしまってあるいらぬものを送ってきているのではないかと思うくらいです。救援物資を送る側がもう少し考えて物資を送

らなければ、物資がただのゴミになってしまうのではないかと思いました。[『それでも奥尻の海は青かった 北海道南西沖地震救援キャンプ報告書』北海道YMCA(1993/10),p.17]

企業からの物は、1箱に同じ種類の物が入っているので扱いやすい(と思われた)のですが、一般家族からの物は、ダンボールを開けて仕分けをしなくてはなりません。行ってすぐの仕事は、その仕分けでした。他のたくさんのボランティアの方々といっしょに行いました。食器や衣類を主に分けたのですが、日本全国から届き、中には手紙のそえられているものもありました。人々の善意を強く感じつつ、小さな力が集まれば、この様に大きな力になるのだ、と感動しました。その反面、仕分けの手間を考えると個人で、細々と古着と食器と食料品をいっしょにして送ってきても困るな...とかものすごい量の古着や使いかけの調味料、賞味期限のきれたレトルト食品、古いぬいぐるみ等を見て、考えさせられもしました。又、食器類などは贈答用の物が多く目につきました。送られてくる物は、家族で不用であるけれども、捨てるには忍びない物。という感じがしました。見ていて、つくづく日本は豊かで、物が余っているのだな、と感じました。その同じ日本に住み、豊かに暮らしてきた奥尻の人々が、果して、古着や古い電化製品などを使うのだろうか?と疑問に思いました。きっと送ってこられた方達は“お金だけでなく何かしたい”という単純な気持ちだったのだろうと思われませんが、今回のこの状況を見て、私自身は家族から、細々とした物資を送るのは避けようと考えたりしました。[『それでも奥尻の海は青かった 北海道南西沖地震救援キャンプ報告書』北海道YMCA(1993/10),p.17]